
バトルオブブレイズ～ラッシュ達の旅～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルオブブレイズ〜ラッシュュ達の旅〜

【Nコード】

N3363Y

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

とある3匹のリザードンがグラド地方というポケモンリーグが開催される地方へと訪れた、それを目指す一匹のリザードン、元ポケハン学園バトル部部长…ラッシュュ、これはラッシュュと仲間達のバトルと冒険の物語である。

※技・術…テイルズシリーズ&オリジナル

プロローグバトル（前書き）

さあ始まりました！ラッシュ達バトル部の続編となる小説『バトル
オブブレイズ〜ラッシュ達の旅〜』

エピソードでの布石でついに続編を書くことになりました！！

記念すべきプロローグバトル！！行くぜ！！

プロローグバトル

ここはモンスターなどが住む世界、モンスワールド

それぞれのモンスターが人間と同じように生活している

そして…新たな物語のページが…今開かれようとしている

……

ここはグラド地方の港町、ランドルーラ

いつそうの船がこの港町に上陸した、そしてハッチから3匹のそれぞれ同じ姿だが色が違うモンスター…ポケモンと呼ばれるモンスターが出てきた

顔は竜みたいでたくましい両翼に太い両足に二本の短い角、そのうちオレンジ色の体色の竜と黒色の体色の竜の両腕は筋肉質でクリム色の腹も腹筋が割れて逞しかった、だが違ってオレンジ色の竜だけは傷が多くあり、右翼膜には傷が目立っている。ピンク色の体色の竜は頭に青いリボンをつけていて首には赤い宝石のペンダントをつけている。3匹のポケモンの種族名はリザードンと呼ばれるポケモンだ

リザードン「ふう〜やっとついたな」

黒リザードン「ついに来たんだなラッシュ…サクラ…」

ピンクリザードン「そうね、どんなところなんだろうねラッシュ、

クロア」

3匹はそれぞれそう言う、まずは3匹の紹介しよう

まずオレンジ色の体色の体中傷だらけのリザードンの名はラッシュという：彼はポケハン町出身のポケモンで元ポケハン学園バトル部の部長である。鍛錬した肉体で色んなライバル達とバトルし、そしてリザードンには使えない波動を使えることができ、相手の気持ちなどを理解でき、技である波動弾を使うことができるリザードンだ次に黒い体色のリザードンの名はクロアという、彼は元はバトル部のものではなかった：だがラッシュと大会でバトルして以来彼はラッシュの父であるリュウオによって養子となった、今はラッシュとは兄弟みたいなものになっている。彼自体：ラッシュがいなかったら変われなかっただろう：

そしてピンク色の体色のリザードンの名はサクラという：彼女はバトル部の一員だった者でラッシュとクロアの旅に同行している。理由はラッシュとの：あれらしい、彼女も好きな彼と一緒にいたい気持ちとかもある。彼女は回復術などを使うため修行もかねて来ているラッシュ「さて、まずは情報を集めて最初のジムが何処にあるのか聞いてみるか」

サクラ「そうね…じゃあ3人で行きましょう…どうせ離れたら嫌だし」

サクラがそう言う

クロア「いいのかそれで？」

ラッシュ「まあいいんじゃないか？ どうせこの町の事俺達はわからないからな」

そう、彼等の目的はこのグランド地方各地にあるジムをめぐる旅…そしてこの地方にあるポケモンリーグに挑戦するつもりだ

ラッシュ「それじゃあ行こうぜ」

ラッシュ達3人は船を降りて港から町の中へ入った

…

サクラ「ひつろゝい！」

ラッシュ「うへえゝこりや迷うな（汗）」

3人は広い港町を見渡す、レンガの家が多くラッシュ達も迷うほどだ、本当は空を飛んだ方がいいが生憎荷物があるため飛ぶことができない、そこに

「お前等？ 道に迷ったのか？」

一匹のポケモンが3人に近づく

両手が鋼鉄のドリルの形をしていて頭の先端部分はドリルの角、目つきは鋭く両頬に3本の赤い線がついていてモグラのような姿のポケモン、ちていポケモンのドリユウズだ

ラッシュ「お前は？」

ドリュウズ「いきなりでわりい、自己紹介するぜ、俺はドリュウズのライナ、道に迷っているなら俺が案内しようか？」

ドリュウズ：ライナが案内とかしてやろうと言う

ラッシュ「俺はいいがクロアやサクラはどうだ？」

ラッシュは二人に聞く

クロア「構わない」

サクラ「空飛んでだと荷物の重荷で飛べないそうだし：：それならOKよ」

二人はOKのようだ

ラッシュ「そうだな：案内してくれるか？俺達ここに来たばかりなんぞな」

ライナ「別地方のポケモンか：：お安い御用さ、俺についてきてくれ」

ラッシュ達はライナに着いていった

……

ライナ「ついたぜ、ここがこの町のポケモンセンターだ」

ラッシュ達3人とライナはポケモンセンターについた、モンスターボールのマークがついている建物：：これがポケモンセンターだ、こ

こは宿泊施設にレストラン：さらには病院やフレンドリーショップと連携しているので買い物や治療までできるのだ、ラッシュュ達の中に入った

ラッシュュ「すごいな」

中に入ると天井などは広く開放感あふれていた

クロア「俺達の地方はポケモンセンターにフレンドリーショップはなかったな」

サクラ「そうね、あたし達の地方はポケモンセンターとフレンドリーショップは別々だったしね」

ラッシュュ達の住んでいる地方：ポケハン地方とは違うことにラッシュュ達は驚く

ライナ「へえ～お前等の地方とは違うんだな：なあ俺もその話聞かせてくれないか？」

ライナは聞きたいとばかりに気になっている

ラッシュュ「そうだな：ちょうど腹減ったから飯でも食いながら話しか」

そう言うラッシュュ達はレストランへと向かった

……

ライナ「うめえ～♪」

ライナはかなりの量を食べていた

ラッシュ「すごい量食うな（汗）」

クロア「どこかのバカ竜と似てるかもな…」

ラッシュ達は哑然としている。

ライナ「すみません！おかわり！」

ラッシュ「まだ食うのかよ！？」

ラッシュはツツコミをいれた

それから数分後

ライナ「はあゝ食った食った♪」

ライナは満足そうに突き出たお腹をさすった

ラッシュ「よく食うなお前（汗）」

ライナ「ああ、まあ成長期ってやつかな」

とそんな事を言う…年齢がわかっていないのに

サクラ「成長期ってあんたいくつよ？」

サクラはライナに年齢を聞く

ライナ「俺は今15だぜ♪」

クロア「15！？俺等より3つ違いじゃねえか！？」

この姿で15歳というのに驚きだ

ラッシュ「これで15か…まあ成長期というか逆に大食いに見えるけどな（汗）」

ラッシュのいうとおり、成長期どころか大食いに見える感じだ

ライナ「まあ細かいことは気にするな♪」

笑顔でライナは言う

ライナ「それよりお前等の地方の話聞かせてくれよ」

ラッシュ「わかった」

ラッシュ達はライナの自分達の地方の事を話した

……

ライナ「へえ、あっちには別のモンスターとポケモンとかが共存していてさらに学校なんてあるんだ。俺んところには学校とかなかったけどな」

どうやらライナがいるグラド地方には学校という存在はないようだ

ライナ「こっちは旅に出るのは15歳ぐらいからなんだ：俺は旅に出たばかりでこの町からスタートしたんだ：まあこの町に来たことあるから大体はわかるけどな」

ライナはこの町に来たことあるため町の事はわかるようだ

ラッシュ「ところでライナは何処の町出身なんだ？」

ラッシュはライナの生まれ故郷の事を聞く

ライナ「俺の町はグルドラというところなんだ：俺は船に乗ってきたんだ、まあ親父とおふくろとここに来たことあるからわかるけどな」

自身満々にライナは言う

ラッシュ「そうか、さて！俺達はこれから最初のジムに行くつもりなんだ」

ライナ「へえ！ラッシュもポケモンリーグに出るんだ」

「ああ！」とラッシュは答える

ライナ「それならまず俺とバトルしてくれないか？」

ライナはラッシュにバトルを申し込む

ラッシュ「それは構わないが本気で行くが構わないか？」

ライナ「もちろん！バトルはそうでないとな♪」

ニカツとライナは笑顔になる

クロア「バトルフィールドに移動するか、外にバトルフィールドがあるからな」

ライナ「そんなじゃ行こうぜ♪」

ライナははしやぎだす、まるでまだ子供のような感じだ

ラッシュ「そんな慌てるなよ、行くからな」

ラッシュ達はポケモンセンターの外にあるバトルフィールドへ

……

バトルフィールドはシンプルな地面のあるフィールドだ、中心にはモンスターボールのマークが描かれている。

クロア「これより、ラッシュ対ライナによるポケモンバトルを始める、どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了となる。二人共…OKか？」

ラッシュ「ああ、こっちはOKだ」

ライナ「俺もOKだ！」

ライナはワクワクしていた。これほどまでバトルしたいのかがわかる

ラッシュ「それじゃあお手並み拝見といこうか…」

ラッシュはファイティングポーズをして構える

ライナ「元バトル部部長の実力がどんなのか見せてもらうぜ！

ライナも両腕で構える

クロア「それじゃあ！バトル…開始！！」

ついにラッシュのグラド地方、最初のバトルが始まる！！

プロローグバトル（後書き）

ついにプロローグバトルを書けた！

ラッシュ（リザードン）「よっ！みんな久しぶりだな！ラッシュこと本名郷田ラッシュだ！」

クロア（黒リザードン）「色々心配かけてすまないな…クロアこと郷田クロアだ」

サクラ（ピンクリザードン）「みんな久しぶりね！サクラこと近衛サクラよ」

3色トリプルリザードンがそろうなんてね！

ラッシュ「作者がそうしたからだろ（汗）」

クロア「まあ俺をなんとかしてくれたのはこの作者だけだな」

サクラ「まあ作者もバカだけど感謝はしているわ」

なんかバカ発言多くね（汗）

ライナ「って！俺の紹介もしてくれよう！」

お前はまだまだめ、もう少ししてからだ

ライナ「えー」

えくじゃねえよったく…というわけで次回はグランド地方最初のバトルとなります

ラッシュ「俺達もがんばるからな！またよろしくなあ！！」

バトル1 グラド地方最初のバトル（前書き）

ついにバトルです

ラッシュ「油断できないな」

まあどうなるかお楽しみに、それでは記念すべきバトル1

ラッシュ「行くぜー!!」

バトル1 グラド地方最初のバトル

ライナ「ドリルライナー！」

ライナは姿をまるでドリルのように身を丸めて突進してきた体が宙に浮き、抵抗力をうむ

ラッシュ「（ここは避けるか）」

ラッシュは防げないと判断し、避けた

ラッシュ「火炎放射！」

ラッシュは避けた後から火炎放射を放つ

ライナ「守る！」

ライナは緑の膜を作り防いだ

ライナ「いわなだれ！」

無数の岩が上空に現れ、ラッシュに向かって降り注ぐ、炎・飛行タイプであるラッシュにはダメージ4倍を食らってしまうだろう…だがラッシュもそのぐらいではびびるポケモンではない

ラッシュ「はあああああー！！！」

ラッシュは気を溜める

ラッシュ「波動！連拳！！」
はどう
れんけん

青いオーラがラッシュの拳を纏う、そこから連続でパンチが繰り出された、岩は木っ端微塵に碎け散った

ライナ「す、すげえ〜（汗）」

ライナはいわなだれが碎かれたことに啞然とする。いやそれ以前にラッシュが強いというのを感じた

ライナ「すげえ〜すげえ〜よラッシュ！」

ラッシュ「ありがとな、ほらよそみすんな！」

ラッシュはライナの懐に入る

ライナ「なっ！？」

ラッシュ「行くぜ！燃えろ！気合の拳！」

ラッシュの拳が炎を纏いライナを殴りつける

ライナ「ぐわっ！？」

ライナは吹っ飛ばされる、だがラッシュはそこから

ラッシュ「竜の心を極め：限界を超える！」

青い球体と紫の球体の二つがライナに当たる、ラッシュは素早くラ

ラッシュ「わりい（汗）大丈夫か？」

ラッシュはライナに声をかける

ライナ「あ、ああ心配すんなよ、俺は平気だぜ♪」

平然とした笑顔で平気なのをアピールした

サクラ「でもライナも強いわね」

クロア「だがまだまだな部分もあるようだな」

こうしてバトルはラッシュの勝利でおさまった

……

ラッシュ「さて、ジムがある町へと向かうか」

クロア「ここからだとファイトシティが一番近いな」

ラッシュ達は最初のジムがあるファイトシティに目的地を決めた

ラッシュ「それじゃあ早速行くか」

ライナ「あっ！俺も一緒に行く！」

突然ライナが荷物をもって行きたいと言う

ラッシュ「いいのか？」

ラッシュはライナに聞く、ライナ本人は

ライナ「ああ！ラッシュみたいなのもいるみたいだし、それに一緒にいたらなんかいいな」と思ってね…俺まだまだ経験不足だろうか
らラッシュとかに稽古つけないからなあいいよな？」

ライナは甘えるようにラッシュ達に視線を向ける、するとラッシュは観念した表情で

ラッシュ「わかった、よろしくなライナ」

ライナ「よろしく！！それじゃあまずはファイトシティへ出発進行
！！」

こうして新たな仲間ライナをむかえラッシュ達の旅は始まった…この先どのような事が起るのだろうか…そしてジムバッジを全部集めることができるのか！

バトル1 グラド地方最初のバトル（後書き）

まあ今回はあっさりな部分になってしまいすみません

ライナ「でも強かったな俺も強くないと」

ラッシュ「まあみっちり鍛えてやっからよ」↑ライナの背中を叩く

ライナ「ぐほっ！軽くやってくれよ！」

ラッシュ「わりい（汗）」

次回はライナの特訓です。

バトル2 ライナの特訓（前書き）

ラッシュ「今回は短いぞ」

ではバトル2

ライナ「貫け！俺のドリル！！」

バトル2 ライナの特訓

一面が草原に包まれるここランド草原

サクラ「結構広いわね」

辺りは草のカーペットで敷き詰められている

ラッシュ「ここなら特訓にはちょうどいいな、ライナ、特訓始めるぞ」

ライナ「わかった！」

ライナは準備をした

……

草原広がるフィールドで二人は互いに目を合わせる…今から対峙し
そんな雰囲気だ

ラッシュ「それじゃあまずはお前が覚えてる技とかだな」

ラッシュはまずライナの技をチェックすることに

ライナ「俺が覚えているのはドリルライナーにいわなだれ、あとは
つめとぎと守るだけ」

ドリルライナーといわなだれと守るは前回使っていてあと一つはつ

めとぎらしい、つめときは攻撃と命中率をあげる技でドリルライナーといわなだれをさらに当てやすくすることができる

ラッシュ「なるほどな…つめときはなぜ俺とのバトルで使わなかったんだ？」

バトルの時ライナはつめときを使っていなかった、使っていればいわなだれを当てやすくなる…ドリルライナーは逆に飛行タイプをもっているラッシュには効果はない、それでも攻撃をしたのだからまだ旅立って間もないため相性がわかっていないのだろう

ライナ「いや…つめときするタイミングがなかったから」

ライナはそう言う、たしかにつめときする隙なら喋っている時でも使用できたのだろう

ラッシュ「だが攻撃技二つしかないのはちょっとな」

ラッシュは頭をボリボリとかく、バランス的にはいいが鋼タイプの技をライナは覚えていないことが気がかりだ

ラッシュ「鋼タイプも覚えて損はないと思うが？それに遠距離系ももう少し覚えた方がいいな…今のお前では勝つのは難しい」

ラッシュは厳しく言う

ライナ「そんな…」

ライナは言葉を失う…

ラッシュ「だが特訓しておけばそれほどでもないだろう…まずは新技とかあとはオリジナル技も覚えておいた方がいいだろう」

ライナ「オリ技？」

オリ技とはオリジナル技の略で、自分で作った技を使うのだ…ただしそれは自分自身がその技を習得しなければならない…オリジナルだけあって考えるのは難しいのだ

ラッシュ「…というわけだ」

ライナ「なるほど…たしかに、考えてみるよ」

ライナは頷いた

ラッシュ「とりあえず休憩に入るとするか」

サクラ「特訓はいいの？」

サクラはラッシュに聞く

ラッシュ「少ししてからだ、まずはゆっくり休んでそれから技の練習だ」

ラッシュはそう言う、ライナに言ったのは基本的な事、いきなり始めるのは無理があるものだ

…

数分後

ライナ「きあい…だま！」

ライナは青緑色の球体を生成する…しかし粒子となって消える

ライナ「難しいな」

ラッシュ「生成するのには集中力が必要だ、それほどの集中力を極めないという意味がない」

クロア「たしかに、技の生成はそれほど難しいんだ…俺が見本を見せる」

そう言うときクロアが出る

クロア「はああああああ……」

クロアは手に力を入れる、するとオレンジ色の球体が生成される

クロア「きあいだま！」

そのままクロアは投げた、地面が爆発し、クレーターができる

クロア「集中力がんばればなんとかなる…それを忘れるな」

ライナ「わかった、にしてもすげえな二人とも、バトル慣れしてるようだ」

ライナはラッシュとクロアに憧れの視線を向ける

ラッシュ「まあ俺やクロアもまだまだ甘い感じもある…それでも充実というのは感じちゃいけない、バトルは楽しくても真剣にならないと勝てない、俺も色々と教えられた師がいたからな…」

ラッシュは空を見た…何処かにいるその師を

ライナ「そうなんだ…」

ぐぎゅるるる…

ライナ「腹減ったな」

ラッシュ「ちょうどいいな、飯にして休憩してから出発しよう…フ
アイトシティまではまだあるしな…ゆっくり行くか」

ラッシュ達は食事を取った

バトル2 ライナの特訓（後書き）

ライナ「うへえ〜ラッシュやクロアもすごいな〜」

それがこの小説主人公だからだ：クロアはレギュラーだけど

クロア「おい（汗）」

ラッシュ「まあゆっくりとな」

そんな次回は途中の町で：

バトル3 コンテスト（前書き）

ラッシュ「コンテスト？」

今回はサクラにも影響するよ

サクラ「あたしに？」

クロア「気になるな」

それじゃあ行くよ…バトル3

サクラ「行くわよ！」

バトル3 コンテスト

グラド地方のポケモンリーグに出場するため旅をしているラッシュ達、ライナを仲間に加えて最初のジムがある。ファイトシティを指していた。

ラッシュ「ここは？」

ライナ「たしかここはグラストタウンだよ、ファイトシティの間となる町」

4人はグラストタウンについた、リボンなどのグラデーションがよく、花も豪華に飾っている

クロア「祭りでもあるのか？」

クロアは気になっていた

ライナ「どうやらこの町でポケモンコンテストをやってるみたいなんだ」

ポケモンコンテスト、それは技をいかに華やかにかつ美しくできるかなのだ

サクラ「ポケモンコンテストねえ…ちょっと見ていきたいけどいいかしら？」

サクラはコンテストを見たいという

ラッシュ「そうだな、バトルとかにも参考になるから行ってみるか」

ラッシュ達はコンテスト会場へと向かった

……

コンテスト会場入口まで来たラッシュ達

サクラ「ん？これ？」

サクラは何か拾い上げた、それは青いリボンだった、そこに

「すみませ〜ん！それ私のです！」

一匹のポケモンがラッシュ達のもとに駆けつける

頭は3つの突起に分かれていて右から赤・白・青となっていて、両翼は白くお腹辺りには赤と青の三角の模様がそれぞれついている。しあわせポケモンのトゲキッスというポケモンだ

サクラ「これあなたの？どうぞ」

サクラはトゲキッスに青いリボンを渡した

トゲキッス「ありがとうございます、あの…お名前は？」

サクラ「あ、名前ね、あたしはサクラ、近衛サクラよ、あなたは？」

トゲキッス「私はフィリー、フィリー・フィアスよろしくねサクラ、

そちらの3人は？」

フィリーと呼ばれたトゲキッスがラッシュとクロアとライナに視線を向ける

ラッシュ「俺はラッシュ、郷田ラッシュだ」

クロア「クロア…郷田…クロアだ」

ライナ「俺はライナ、ライナ・ラガンだよ」

ラッシュ達は自己紹介する

フィリー「ラッシュさんにクロアさんにライナさんですか…あ！私急いでいるのでそれじゃあ！」

フィリーは一目散に会場に入ってしまった

ラッシュ「急いでいたな？」

クロア「大会参加者なのか？」

サクラ「そうかもしれないわね…でも慌てているなんてまだコンテスト始まるまで時間あるのに」

サクラはそう言う

ライナ「中入ろうぜ」

ライナは会場に入る

「ラッシュに入るか」

クロア「ああ」

その後をラッシュ達は入った

-
-
-
-
-
-

コンテスト会場はグラデーションがよく、それぞれ彩りのリボンが飾られている。すると会場は暗くなった…すると

「始まりを物語る会場で……今ここにコンテストの幕が上がる……」

そこからスポットライトが一匹のポケモンに浴びる、長い耳にスタイル抜群の体をもっていて体色が茶色のポケモン、うさぎポケモンのミニロップだ

ミミロップ「ついに始まりましたポケモンコンテストIⅢNグラス
タウン！」

わあああああああああああああああああああああ
 ああああああ！！！！

会場は大歓声をあげる

ラッシュ「これほどまでポケモンコンテストは熱気あるな」

ラッシュ達のバトルとは違い、コンテストは魅せるためのもの：サクラはなぜか真剣になっていた

ミミロップ「司会は私、ミミロップのミミアンがお送りします♪」
かわいい感じにミミロップ…ミミアンが会場を虜にさせる、周囲から『かわいい〜』やら『萌え〜』やらの声がとぶ

ミミアン「数々のコーディネーターの中で優勝したコーディネーターにはこのグラストリボンを贈呈いたします♪」

ミミアンは懷からグラス色（黄緑っぽい）のリボンを取り出した

ミミアン「なお5つのリボンを集めたコーディネーターにはグラストフェスティバルへの出場権を獲得することができます♪そして審査員は…」

審査員はそれぞれポケモンセンターのタブンネというヒヤリングポケモンとコンテスト審査員、そしてポケモン好きクラブのポケモンなどの3人が審査員をやるようだ

ミミアン「それでは早速コンテストと参りましょう♪」

コンテストが始まった

ラッシュ「いよいよか…」

ラッシュ達は真剣になってコンテストを見る

……

コンテストは1次審査、2次審査と分けられている。まず1次審査

は技をいかに魅せるかのアピールだ、それぞれのコーディネーターが自分達の技をアピールする。さらにコンテストでは団体での参加も可能となっていた。

コンテストは元々は個人のためだけだったが：時代は進み、今はチームでのコンテストが可能となったのだ、もちろんチームは個人だけれども構わないらしい：

サクラ「すごいわね：チームでの参加まであるみたいね」

ラッシュ「たしかにそうだな：コンテストはおふくろも出ていておふくろもかなりの実力だったみたいだったしな」

ライナ「へえラッシュのお母さんってコーディネーターもやっていたんだ」

ライナは納得する

ラッシュ「と言ってもおふくろはこれでも元トップコーディネーターだからな：それで化粧品など美に関するのをやっているからな」

ラッシュの母でもあるリエナは元はトップコーディネーターでもあった：だがラッシュはバトルの方なので興味はないらしい、しかしサクラは

サクラ「あたし：やってみたいのよね：コンテスト：」

サクラはもじもじとする

ラッシュ「サクラ：」

すると

ミミアン「さあ！1次審査も残すところ後一人、では参りましょう！セイグリアタウン出身のトゲキッス！ファイリー・フィアスさんです！」

会場からファイリーの姿が現れた

サクラ「ファイリー…しかも綺麗ね」

サクラはウツトリとしてしまった、ファイリーは先ほどサクラが拾ってくれた青いリボンをつけているのだ

ファイリー「いきますよ！まずは波動弾！」

ファイリーは上空から波動弾を放つ、そこに術を詠唱する

ファイリー「サンダーブレード！」

上空から雷の剣が波動弾を貫く、すると波動弾は粒子となって弾き飛んで輝きを生み出す、ファイリーはそこから体を回転する。それはまるでトリプルアクセルのような感じだ

ファイリー「決めます、輝く光の聖壇…セイクリッドブレイム！」

背景が教会のステンドグラスを表し、十字を刻み込む…そこから光が輝きファイリーをより美しく輝かせた、ファイリーはそこから舞い降りて着地して決めた

わあああああああああああああああああああああああ！
！！！！！！！！

観客はおおいにわいた

ミミアン「すごい！光を豊かに表現しています！」

まず審査員のポケモン…白鳥みたいなポケモン…スワンナは

スワンナ「いやゝ光をこうして輝かせて自身をより美しくさせるとは」

スワンナの隣にいるポケモン…ブリザードポケモンのバイバニラは

バイバニラ「いやゝこの美しさは好きですねゝ」

のんきにそう言う

そしてその隣にいるタブンネは

タブンネ「輝かしい見事な演技でしたゝ」

と、3人とも好評価だった

……

1次審査の結果、フィリーは2次審査のコンテストバトルに進出した、サクラは急いでフィリーの元へ

サクラ「フィリー！」

フィリー「あなたは先ほどの、サクラさんでしたよね？」

控え室でサクラはフィリーの元へ駆けつけた

サクラ「あなたすごいわ！こんなことできるなんて！」

サクラはいきいきとした表情で興奮が冷めない感じだった

フィリー「ええ、でも私はまだまだ実力が甘いですわ…でも2次審査のコンテストバトルは難しいんです」

フィリーはコンテストバトルは難しいという、それはなぜかという
と…コンテストバトルは普段のバトルとは違い、技をどう魅せるか
によって勝利が左右となる審査なのだ、それぞれの技をどう魅せる
か、相手を倒すのもそうだが一番は技を魅せる…それがコンテスト
バトルなのだ

フィリー「でも応援してくれてありがとうございます…私緊張して
いました…」

サクラ「そうなんだ…2次審査がんばってね」

サクラはフィリーを励ます

フィリー「はい♪」

フィリーは笑顔でサクラにがんばるとアピールする

バトル3 コンテスト（後書き）

サクラ「コンテスト…あたしもできるかな」

ラッシュ「まあおふくろいたらなんとなるけどな…」

クロア「まああれでもな」（汗）

ラツちゃんとかクロちゃん言われてるからね

クロア「クロちゃんとか思いっきり某サイボーグロボのだけは勘弁してくれ（汗）」

さあどうだろうね（黒）

ライナ「次回もお楽しみに〜♪」

バトル4 決意の絆（前書き）

さて、コンテストの続きです

ラッシュ「なんだか俺達出番ないな」

まあほぼサクラの出番が多いけどね（汗）

サクラ「それじゃあいくわよ！バトル4魅せるわよ！」

コンテストバトルはポイント制でポイントが多い方が勝ち、または戦闘不能になった、ポイントがなくなった場合は負けとなる。これがコンテストバトルの勝利と敗北条件だ

フィリーの方に戻そう、さらにフィリーはそこから隙を見て術を詠唱した、すると今度はラフレシアが宙に浮いていた。トラクタービームという術だ、この術は重力場を発生させて相手を天高く跳ね上げらせる術だ、そこからフィリーは再び波動弾を放つ

ミミアン「おっと！ここでフィリー選手は再び波動弾を放つ、一体何をしようとしているのか！」

だが波動弾を何度も使えばそれは減点の対象にもなる。だが見た目は波動弾に見えるが実はただの波動弾ではないのだった

波動弾がラフレシアに触れると爆発が起きた、爆発した波動弾は粒子となって輝いていた。実はこれは波動弾を集めて作ったフィリー特製の波動ボムなのだ

フィリー「波動ボム完成です♪」

ニコリとフィリーは笑顔でそこから体を回転させて右手：右翼から風を集めてラフレシアに向かって放つ、エアスラッシュと呼ばれる技だ、それが波動ボムにあたり波動ボムの粒子がエアスラッシュの風につけてより輝かしくなった、同時にラフレシアにダメージが与えられる…するとラフレシアのポイントは減点される

ピーー！

ここでタイムアップがなった、コンテストバトルの制限時間は5分

ほど…だがグランドフェスティバルでは10分となっている。

ミミアン「圧倒的な差でフィリー選手が2回戦進出です！」

わあああああああああああああああつ！！！！！！

サクラ「(す…すごい…)」

サクラは呆然としていた。これがコンテストなのだと…

ラッシュ「コンテストは技とのコンボで成り立っているようだな」

クロア「それも術も加えてだ、あれだけ術を詠唱して技をよりいっそう輝きだしている」

ラッシュとクロアはフィリーを評価する。ここまで波動弾や術を使うとは思ってもみなかったのだ

それからコンテストバトルはかなり白熱としたものとなった、フィリーは巧みに術と技をタイミングよく使って相手を圧倒させる。フィリーは決勝進出、残るはついに決勝となった

…

決勝戦はフィリーと額に赤い宝石がついているポケモン、たいようポケモンのエーフィとの対決だ

ミミアン「ついに残すところ決勝へと来ました…リボンを勝ち取るのは誰なのか…トゲキッスのフィリーさん、エーフィのコサクヤさ

ん…果たして優勝するのは!!」

フィリーとコサクヤと呼ばれるエーフィがフィールドに立つ

サクラ「(いよいよね…コンテストってこんなにすごいなんて…あたし…)」

サクラは何か決意をした表情をする

ミミアン「それでは決勝戦…はじめ!!」

ついに決勝戦のまくがあがる

フィリー「いきます! ウィンドアローからさらに銀色の風です!」

フィリーは術であるウィンドアローを唱えた、フィリーの頭上から風の矢がいくつも生み出され、そこからりんぷんをのせた風が風の矢と一緒にコサクヤに向かっていく

コサクヤ「サイコネシス」

ここでエスパ―技サイコネシスでウィンドアローと銀色の風のコンボ技を止める、これによりフィリーのポイントは減点される

フィリー「波動弾!」

隙をつきフィリーは波動弾を放つ

コサクヤ「返しますわ」

それに気づいたのかコサクヤはサイコキネシスでフィリーのコンボ技を返した、波動弾とウィンドアロー付きの銀色の風は相殺された、再びフィリーのポイントが減点される

フィリー「（厄介になってきました…どうしたら…）」

フィリーは困惑する、そこから

コサクヤ「フォトンからサイコキネシス」

コサクヤは収束した光を数個生成し、サイコキネシスでフォリーに向かって放つ、だが

フィリー「光の槍よ…貫いて…ホーリーランス！」

光を帯びた槍が数発も光を貫いて相殺した、コサクヤのポイントが減っていった

フィリー「まだまだこれからです！水の波動！そしてウィンドアロー！」

フィリーは水の輪を生成して放ち、そこから頭上に風の矢を生成、風の矢は水の輪の中央へと向かった、水の波動とウィンドアローを組み合わせたコンボだ

コサクヤ「流蓮弾^{りゅうれん}！フォトン！」

こちらは圧縮した水流弾と収束の光を撃ち放つ、またもや二つの技と術は相殺された

ピーー!!

ミミアン「ここでタイムアップ!! はたして勝ったのは!」

電工掲示板を見る: フィリーとコサクヤのポイントはコサクヤがリードしていた

ミミアン「白熱したコンテストバトル! 優勝したのは! エーフィのコサクヤさんです!!」

わああああああああ!!!!!!

会場は大歓声をあげた

サクラ「負けちゃったみたいね」

サクラは落ち込む

ラッシュ「だがコンテストは厳しいものだと思うぜ? そう簡単なものでもないからな」

ラッシュはそう言う

サクラ「そうね」

ライナ「フィリーさん残念だったね」

……

ミミアン「それでは優勝したコサクヤさんにはグラストリボンを贈

呈いたします！」

スワンナ「おめでとう！」

スワンナがコサクラにリボンを贈呈した、彼女は嬉しく飛び上がった

ミミアン「これにてポケモンコンテストグラスト大会を終了いたします！また何処かの町でお会いしましょう！」

こうしてコンテストは終わった

……

コンテストを終えたフィリーは溜め息をつく

フィリー「(正直私の力不足なのかもしれない…それにコンテストは一人での参加はOKだけどチームでの参加も認められている…でも迷ってしまう…)」

フィリーは迷った…この先自分一人でコンテストでがんばっていくのか…それともチームを組んでコンテストに参加すべきかだ

実はポケモンコンテストではチームでの参加は認められているのでグランドフェスティバルでもより多くのポケモン達とチームを組めば有利となるのだ、だが彼女は一人で参加して優勝できなかったこともあって落ち込んでいる。

フィリー「(優勝できなかったから…一人ではコンテストは無理なのかしら…)」

そんな時

サクラ「フィリー」

フィリー「サクラさん!？」

サクラが来た

サクラ「席座っていいかしら？」

フィリーはこくりと頷いてサクラはフィリーの隣に座った

サクラ「あたしね：フィリーのコンテストや他のコーディネーターを見て：こんなに美しくできるなんて：あたしもやってみたいと思った：でも負けたらそれは辛いかもしれない：でもねあたし：やりたいの：そのためには」

サクラはフィリーの手を優しく掴む

フィリー「!？」

サクラ「フィリー、あたしにコンテストの事色々教えてほしい：だから私達と一緒に行かない？あたしもコンテストはやりたかったから」

サクラは自信を見せる、それは自分がコンテストという大きな生きがいを見つけたのだから：サクラは最初、目的などなかった：ただラッシュに着いて行ってさらに自分の技や術を磨くために旅に同行している。そしてコンテストはそんなサクラにきっかけをつくったのだ

フィリー「でも私…」

サクラ「負けても夢をあきらめない…あたしも目標はできたわ…でもここで逃げていちゃ…夢をあきらめたことになるわ」

フィリー「…」

フィリーの目から涙が零れ落ちる

サクラ「あたし…たとえ負けてもコンテストを楽しくできるようにしたい…そして全力で勝ちたい…そう思ってる、あたし自信できることをやりたいの…」

するとフィリーは

フィリー「サクラさん…私もここで落ち込んでるわけにはいかないですね…なら私もあなたとチームを組んで一緒にがんばりましょう！あなたの思う魅せることを」

そこから

ラッシュ「話をついたか？」

ライナ「これで仲間が増えたね」

ラッシュ、クロア。ライナの3人だ

クロア「これでなんとかなったな…」

サクラ「ええ、それじゃあファイトシティに行きましょう！」

ファイリー「ファイトシティですね…みなさんよろしくお願いします
！！」

ファイリーは頭を下げた

ラッシュ「いや頭下げなくてもいいぜ」

クロア「もう仲間なんだから」

ファイリー「はい！」

ファイリーはしっかりと返事した、こうしてファイリーを仲間に加え一同はファイトシティを目指す！！

バトル4 決意の絆（後書き）

ファイリー「みなさん初めまして、新たに仲間になったファイリー・フィアスです」

ライナ「ねえねえ作者さーん、俺思っただけど仲間とかコンテストとかこれってどうなのかな？」

あゝそれね、それぞれコンテストのチームとポケモンリーグのチームへと分けるよ、つまり

バトル

・ラッシュ

・クロア

・ライナ

コンテスト

・サクラ

・ファイリー

となるよ

ライナ「へえ」

ちなみにフィリーのイメージCVは井上喜久子さんだよ

サクラ「たしかテイルズオブデスティニーのフィリアとアニメのポケモンでメリッサさんとトゲキッスの声だったわね？」

そう、トゲキッスだから、それに年齢は17歳だからね？

フィリー「はい♪17歳です♪」

サクラ「ここで言わないの(汗)」

クロア「この先思いやられそうだ(汗)」

ちなみにまだライナのイメージCV決まっていけないけどね(汗)

ライナ「早く決めてー!!」

慌てるな(汗)

ラッシュ「慌てても何も解決しないぞ」

ライナ「ごめん(汗)」

バトル5 バカでアホな3人組登場(前書き)

ラッシュ「なんかどこぞのあいつらみたいなタイトルだな」

まああいつらポジションのキャラ達が登場します

ラッシュ「そんじゃあバトル5」

クロア「ぬうん!!」

バトル5 バカでアホな3人組登場

ラッシュ達はグラストタウンでトゲキッスのフィリーを仲間にして
ファイトシティを目指して旅をしていた。途中彼等は休憩をしていた
ラッシュ「とりあえずこんなもんだな」

小型の折畳み式テーブルの上にはおいしそうなごちそうがたくさん
並んでいる

ライナ「早く食おうぜ！」

ライナは待ちきれない様子だ

フィリー「まあまあ、まずは手を洗ってからにしましょう」

ライナ「ちえっわかったよ」

ライナはしぶしぶと近くの川へ手洗いに

サクラ「木の実足りないわね、フィリーとラッシュ、手伝ってくれ
ない？」

ラッシュ「わかった」

クロア「俺も手を洗いに行く」

それぞれ分かれて行く、それを見ていた者達がいた

「しめしめ、チャンスだよお前達」

「俺達に恵んできた天の恵みだ（泣）」

「姉貴、奴らが帰る前に食料を取りましょう」

それは3匹のポケモンだった、1匹は頭に骨が刺さっていてかんざしみたいな感じの鳥のようなポケモン、1匹は濃い赤紫と黒のしましまの体色に両目の周りにサングラスのあとがついているような黒いものがついていて二足のワニのようなポケモン、そしてもう1匹は腹に丸い刃が二枚つけていて目つきが悪いポケモンだ

順番にバルジーナ、ワルビアル、キリキザンだ

バルジーナ「お前達！今のうちに食料を奪うんだよ！！」

ワルビアル・キリキザン「ラジャー！！」

3匹はできたての料理を早速食った・・・そこに

クロア「おい、何してるんだテメェ等」

ギクツと3匹は声の方を振り向いた、そこには手を洗ったはずのライナとクロアがいた、さらに

ラッシュ「どうも誰かの気配を波動で感じたと思ったら、やっぱりな」

木の実取りに行ったはずのラッシュ、サクラ、フィリーもいた

バルジーナ「ば、バカな！？どうして早く帰ってきたんだい！？」

クロア「俺たちが気付いていないと思ったか？」

パキポキとクロア両腕の骨が鳴る

ラッシュ「お前達は何者だ！」

ラッシュが3人を指さしする

バルジーナ「フッフッフツ・・・バレちゃ仕方ないね、あたい達は！」

3人はポーズを決める

バルジーナ「黒き一輪のバラ、バルジーナのルコツ！」

ワルビアル「ワルビアルのビオス！」

キリキザン「キリキザンのクロツキ！」

3人『3人合わせて！我等！闇の翼！』

シャキーン！と決めポーズを決める闇の翼の3人

5人『闇の翼？』

5人は同時に詠唱した

ルコツ「そう！あたい達は盗みをする盗人3人組だよ！」

ビオス「どうだ！恐れ入ったか！」

ルコツというバルジーナとビオスと呼ばれるワルビアルの言葉に5人は

5人『全然』

闇の翼『だあー！！』

闇の翼3人はずっこけた

ルコツ「おのれ！あたい達をコケにしたな！！悪の波動！！」

ビオス「俺達を怒らせたこと後悔させてやる！！かみくだく！！」

クロツキ「食らえ！つじぎり！！」

闇の翼3人はラッシュ達を襲う…だが

ラッシュ「殺劇舞荒拳！」

クロア「黒炎拳！」

サクラ「フオトン！」

ラッシュは神速してクロツキに連続で殴り、クロアは黒い炎を纏った拳でビオスを殴り、サクラは早い詠唱で収束した光の術がルコツを襲う

闇の翼『ぎゃああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!
』

闇の翼の3人は吹っ飛んで宙に飛んだ

ルコツ「キッ!!!覚えてな!!!」

ビオス「また会った時にはリベンジしてやるからな!!!」

クロツキ「俺達闇の翼の名を覚えてもらうからな!!!」

闇の翼『あゝれゝ!!!』

キラんと闇の翼の3人は星となった

クロア「アホだこいつら（汗）」

クロアは呆れたように言う

ライナ「それよりあいづらに食われちゃったしどうすんだよ!!」

ライナは文句を言うが

サクラ「それならちようど木の実集めたからそれでもう一度作るわ、
ライナ、あんたも手伝いなさい!」

ライナ「えゝ!」

ライナはめんどくさそうな顔をするが

サクラ「自分だけ怠けるなんてそうはいかないわよ」

サクラはライナを睨みつける

ライナ「うゝわかったから睨まないでゝ（泣）」

女は怖いものだ…ライナは手伝うことになった

ラッシュ「さて、俺もやるか」

ラッシュも料理する準備をする

…

一方

ルコツ「あのリザードンズ」

ビオス「次に会った時はからなず」

クロツキ「復讐してやる！」

ボロボロの闇の翼の3人は崖の上にいた

ビオス「それより姉貴…姉貴は空飛べるから大丈夫だが俺達どうやってここから脱出すればいいんすかゝ（泣）」

ルコツ「自分達でなんとかしな！」

クロツキ「ひどいですよ姉貴」(泣)

空を飛べない二匹は涙目になる

闇の翼はこの後どうなるか…それはみなさんのご想像にお任せします

バトル5 バカでアホな3人組登場(後書き)

ルコツ(バルジーナ) 「作者!! よくもあたいた達をこんな目に合わせたね!!」(怒)」

ビオス(ワルビアル) 「あいつら強すぎじゃねえか!!」(怒)」

クロツキ(キリキザン) 「どうしてくれる!!」(怒)」

えゝこいつらはマジで前の3人組みたいなポジションです。変わってきてむなしくなったのでこうしました

闇の翼『おい!!」(怒)』

まあ闇の翼とかは本当はテイルズ定番の漆黒の翼にしようと思っていましたが…そうなるとう原作的にも事情的のため闇の翼にしました…まあこいつらは出番あるたびにバカとアホなことになるので(笑)

闇の翼『ふざけるな!!」(怒)』

それでは次回もお楽しみに

闇の翼『おい! k』↑強制終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3363y/>

バトルオブブレイズ～ラッシュ達の旅～

2011年11月18日11時38分発行